資料　主な発達障がいの定義について

主な発達障がいの定義（文部科学省のホームページから抜粋）

＜自閉症＞

自閉症とは、３歳位までに現れ、
①　他人との社会的関係の形成の困難さ
②　言葉の発達の遅れ
③　興味や関心が狭く特定のものにこだわる
ことを特徴とする行動の障がいであり、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

＜高機能自閉症＞

高機能自閉症とは、３歳位までに現れ、
①　他人との社会的関係の形成の困難さ
②　言葉の発達の遅れ
③　興味や関心が狭く特定のものにこだわる
ことを特徴とする行動の障がいである自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないものをいう。
また、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

＜学習障がい（ＬＤ）＞

学習障がいとは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、各、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。
学習障がいは、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障がいがあると推定されるが、視覚障がい、聴覚障害、知的障がい、情緒障がいなどの障がいや、環境的な要因が直接の原因となるものではない。

＜注意欠陥／多動性障害（ＡＤＨＤ）＞

ＡＤＨＤとは、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び／又は衝動性、多動性を特徴とする行動の障がいで、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。
また、７歳以前に現れ、その状態が継続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

※　アスペルガー症候群とは、知的発達の遅れを伴わず、かつ、自閉症の特徴のうち、言葉の発達の遅れを伴わないものである。なお、高機能自閉症やアスペルガー症候群は、広汎性発達障がいに分類されるものである。

関連用語

◆アセスメント（assessment）

支援を必要としている生徒の状態像を理解するために、生徒に関する情報を様々な角度から集め、その結果を総合的に、整理、解釈していく過程である。

◆自閉症スペクトラム障害（ＡＳＤ　Autism Spectrum Disorders）

自閉症、高機能自閉症、アスペルガー症候群の間には明確な境目はなくスペクトラムの状態にあるといわれている。これを自閉症スペクトラムという。広汎性発達障がいと同じ意味である。今はＡＳＤという言い方が多い。

◆ソーシャルスキル（social skill）

「社会技能」「社会的技術」等と訳される。社会生活や対人関係を営んでいくために、必要とされる技能。発達障がい等のある生徒は、ソーシャルスキルが身に付いていなかったり、知らなかったりするために、友人関係や集団生活で不利を被っていることがある。そのため、人との関わり方などの「やり方」や「コツ」を具体的に教えるなど、ソーシャルスキルを豊かにするように支援することが必要となる。

◆二次(的)障がい

障がいに由来する本来の症状が原因で環境との不適応を起こしたために生じた様々な症状。環境としては、家庭環境（経済状態、養育の状態、家族構成など）、学校での状況（学習への参加状況、集団参加の状況、教師、友人などとの人間関係）など、生徒を取り巻く様々なものがある。与えられた環境の中で無理解や誤解を受け、叱責や失敗体験が度重なることで自尊心が低下し、二次(的)障がいを起こす。

◆ユニバーサルデザイン（ＵＤ　universal design）

障がいの有無、年齢、性別、人種等に関わらず多様な人々が利用しやすいよう都市や生活環境をデザインする考え方。『LD・ADHD・高機能自閉症の子どもの指導ガイド（国立特別支援教育総合研究所）』では、「（障がいのある）子どもに対する「特別な配慮」がすべての子どもの「分かりやすさ」につながり、学力向上につながること等の報告がたくさんあります。」と記述されている。

インターネットによる情報

◆文部科学省特別支援教育関係ホームページ

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main.htm

◆独立行政法人国立特別支援教育総合研究所ホームページ

http://www.nise.go.jp/
http://www.nise.go.jp/portal/index.html

◆国立特別支援教育総合研究所　発達障害教育情報センター

http://icedd.nise.go.jp/blog/index.html

子どもと教師のための実態把握シート

学 校 名	
学年・組	年　　組
名前（よりがな）	
記 入 者 職・氏 名	① ② ③ ④
実施年月日	平成　　年　　月　　日

宮崎県教育研修センター

【平成１８年8月１５日 改訂版】

「子どもと教師のための実態把握シート」の使い方

この実態把握シートは，＜小・中学校の，おもに通常の学級に在籍する全般的な知的発達に遅れは感じられないが，学習面や行動面で著しい困難を抱えていて，学校生活を送るうえで“困っている子どもたち”＞のことを教師が正しく理解し，豊かな学校生活が送れるようになることを目指して，実態把握において最初に使用するために作成されたものである。

＜実施方法＞

① 気になる子どもの学級担任及び関係の深い教員が，数名で協議しながら一つのシートに回答する。この際，特別支援教育コーディネーターがリードし，特別支援教育担当者等の協力を得るとよい。

② 校内の気になる子どもに対して，実態把握の一つの方法として使用する。まず，＜実態把握シート①～③＞の３枚を３枚とも実施する。この実態把握シートは，学習面や行動面に著しい困難があるかどうかを判断するための一資料であり，ＬＤやＡＤＨＤ，高機能自閉症等の判断を学校が行うためのものではない。

（※ ＬＤ.ＡＤＨＤ.高機能自閉症等の判断には，専門機関等との連携による詳細な実態把握が必要になる）

③ 実施する際には，文部科学省（平成１６年１月）の，「小・中学校におけるＬＤ，ＡＤＨＤ，高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」の，P.76~84 を参考にするとよい。

④ ＜実態把握シート①～③＞は，文部科学省のチェックリストに基づいて県学校教育課が「特別支援教育推進体制モデル事業」で使用したものを一部改編し，宮崎県教育研修センターで作成したものの改訂版である。記入に当たっては，各シートの（判断の基準）に基づいて記入する。例示してある事項については，具体的な実態を質問項目欄などに記入するとよい。

⑤ ＜実態把握シート④＞「気になる子どもの実態把握表」は，子どもの全体像を把握するのに有効なので，学級担任が中心となって関係教師や保護者等と連携しながら作成する。この際，子どもの国語や算数（数学）等のノート，絵・作品のコピー（写真）なども添付するとよい。

⑥ ＜実態把握シート①～④＞を基にして校内委員会を開催し，＜校内委員会としての考え＞の欄を記入する。

⑦ これらの情報は大切な個人情報であるため，取扱いには細心の注意が必要である。

＜校内委員会として，“詳細な実態把握が必要”と判断した場合＞

○ 保護者の了解を得て，外部の専門機関につなぐことになる（校内で詳細な実態把握が可能な場合は校内で）。その際，保護者が不安を抱かれないよう，保護者に寄り添いながら，子どもの支援を一緒に考えていく姿勢が大切である。検査や診断を教師が勧めてしまうと，保護者の不安を高めてしまう場合が多い。

○ 外部の専門機関への依頼は，担任教師が行うのではなく，特別支援教育コーディネーターが窓口になって進める必要がある（初回の教育相談は，コーディネーターが設定してあげると保護者は安心される）。

○ 保護者の了解がすぐには得られない場合でも，子どもの実態に合った可能な支援を工夫しながら行い，保護者との信頼関係を高めていきたい。

＜具体的な支援につなげるために＞

○ 「子どもと教師のための支援シート」（センター Web ページ）を活用して，校内の関係する教職員で話し合いをもち，これからの具体的な支援を検討する。

○ 「個別の指導計画」を作成する（作成に当たって，保護者や本人の願いを大切にする必要がある。専門機関等の詳細な実態把握の結果が得られれば，保護者の了解を得て入手するとよい）。

<実態把握シート ①>

学習面に関する困難を調べる項目

（判断の基準）

- 全般的な知的発達に遅れのある場合は，調査の対象から除く。
- 「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」の６領域に各５問ずつ，計３０項目から構成される。
- ４段階で回答する。（ない…0点　まれにある…1点　ときどきある…2点　よくある…3点）
- 各領域ごとに合計得点を出し，12ポイント以上の領域が一つでもあれば，「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」のいずれかに著しい困難を示すと考えられる。

No.	領域	質問項目	得点	計
1	聞く	聞き間違いがある（例:「知った」を「行った」と聞き間違える）		
2		聞きもらしがある		
3		個別に言われると聞き取れるが，集団場面では難しい		
4		指示の理解が難しい		
5		話し合いが難しい（話し合いの流れが理解できず，付いていけない　等）		
6	話す	適切な速さで話すことが難しい（たどたどしく話す。とても早口である　等）		
7		言葉につまったりする		
8		単語を羅列したり，短い文で内容的に乏しい話をする		
9		思いつくままに話すなど，筋道の通った話をするのが難しい		
10		内容をわかりやすく伝えることが難しい		
11	読む	初めて出てきた語や，普段あまり使わない語などを読み間違える		
12		文中の語句や行を抜かしたり，または繰り返し読んだりする		
13		音読が遅い		
14		勝手読みがある（例:「いきました」を「いました」と読む）		
15		文章の要点を正しく読みとることが難しい		
16	書く	読みにくい字を書く（字の形や大きさが整っていない。まっすぐに書けない　等）		
17		独特の筆順で書く		
18		漢字の細かい部分を書き間違える		
19		句読点が抜けたり，正しく打つことができない		
20		限られた量の作文や，決まったパターンの文章しか書かない		
21	計算する	学年相応の数の意味や表し方についての理解が難しい （例:三千四十七を300047や347と書く。分母の大きい方が分数の値として大きいと思っている）		
22		簡単な計算が暗算でできない		
23		計算をするのにとても時間がかかる		
24		答えを得るのにいくつかの手続きを要する問題を解くのが難しい （例:四則混合の計算。2つの立式を必要とする計算）		
25		学年相応の文章題を解くのが難しい		
26	推論する	学年相応の量を比較することや，量を表す単位を理解することが難しい （例:長さやかさの比較。「15cm は150mm」ということ）		
27		学年相応の図形を描くことが難しい（例:丸やひし形などの図形の模写。見取り図や展開図）		
28		事物の因果関係を理解することが難しい		
29		目的に沿って行動を計画し，必要に応じてそれを修正することが難しい		
30		早合点や，飛躍した考えをする		

<実態把握シート ②>

行動面に関する困難を調べる項目（「不注意」，「多動性-衝動性」）

（判断の基準）

- 全般的な知的発達に遅れのある場合は，調査の対象から除く。
- 「不注意」「多動性・衝動性」に関する各９項目，計１８項目から構成される。
- ４段階（A，B，C，D）で回答する。

  [ない，もしくはほとんどない‥(A) 0点， ときどきある‥(B) 0点，しばしばある‥(C) 1点，非常にしばしばある‥(D) 1点]
- 「不注意」または「多動性ー衝動性」の少なくとも一つの群で，該当する項目が６ポイント以上であれば，

  「不注意」または「多動性ー衝動性」の問題を著しく示すと考えられる。

「不注意」「多動性ー衝動性」

No.	設問群		質　問　項　目	段階	得点
1	不注意		学校での勉強で，細かいところまで注意を払わなかったり，不注意な間違いをしたりする		
2			課題や遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい		
3			面と向かって話しかけられているのに，聞いていないように見える		
4			指示に従えず，また仕事を最後までやり遂げない		
5			学習課題や活動を順序立てて行うことが難しい		
6			集中して努力を続けなければならない課題（学校の勉強や宿題など）を避ける		
7			学習課題や活動に必要な物をなくしてしまう		
8			気が散りやすい		
9			日々の活動で忘れっぽい		
10	多動性ー衝動性	多動性	手足をそわそわ動かしたり，着席していても，もじもじしたりする		
11			授業中や座っているべき時に席を離れてしまう		
12			きちんとしていなければならない時に，過度に走り回ったりよじ登ったりする		
13			遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい		
14			じっとしていない。または何かに駆り立てられるように活動する		
15			過度にしゃべる		
16		衝動性	質問が終わらない内に，出し抜けに答えてしまう		
17			順番を待つのが難しい		
18			他の人がしていることをさえぎったり，じゃましたりする		

［合　計］

「不注意」の 得点 ……［　　点］

「多動性ー衝動性」の 得点 ……［　　点］

<実態把握シート ③>

行動面に関する困難を調べる項目（「対人関係やこだわり等」）

（判断の基準）

- 全般的な知的発達に遅れのある場合は，調査の対象から除く。
- 「対人関係やこだわり等」に関する各２７項目から構成される。
- ３段階で回答する。（いいえ…０点　　多少…１点　　はい…２点）
- 該当する項目が２２ポイント以上であれば，「対人関係やこだわり等」の問題を著しく示すと考えられる。

「対人関係やこだわり等」

No.	質　問　項　目	得点	合 計
1	大人びている。ませている		
2	みんなから，「○○博士」「○○教授」と思われている（例：昆虫博士，カレンダー博士）		
3	他の子どもは興味を持たないようなことに興味があり，「自分だけの知識世界」を持っている		
4	特定の分野の知識を蓄えているが，丸暗記であり，意味をきちんとは理解していない		
5	含みのある言葉や嫌みを言われても分からず，言葉通りに受けとめてしまうことがある		
6	会話の仕方が形式的であり，抑揚なく話したり，間合いが取れなかったりすることがある		
7	言葉を組み合わせて，自分だけにしか分からないような造語をつくる		
8	独特な声で話すことがある		
9	誰かに何かを伝える目的がなくても，場面に関係なく声を出す （例：唇を鳴らす，咳払い，喉を鳴らす，叫ぶ）		
10	とても得意なことがある一方で，極端に不得手なものがある		
11	いろいろな事を話すが，その時の場面や相手の感情や立場を理解しない		
12	共感性が乏しい		
13	周りの人が困惑するようなことも，配慮しないで言ってしまう		
14	独特な目つきをすることがある		
15	友達と仲良くしたいという気持ちはあるけれど，友達関係をうまく築けない		
16	友達のそばにはいるが，一人で遊んでいる		
17	仲の良い友人がいない		
18	常識が乏しい		
19	球技やゲームをする時，仲間と協力することに考えが及ばない		
20	動作やジェスチャーが不器用で，ぎこちないことがある		
21	意図的でなく，顔や体を動かすことがある		
22	ある行動や考えに強くこだわることによって，簡単な日常の活動ができなくなることがある		
23	自分なりの独特な日課や手順があり，変更や変化を嫌がる		
24	特定の物に執着がある		
25	他の子どもたちから，いじめられることがある		
26	独特な表情をしていることがある		
27	独特な姿勢をしていることがある		

<実態把握シート ④>

「気になる子どもの実態把握表」

学年・組		名前	
学習の状況	国語 算数(数学) 他の教科 ※ 国語・算数等のノートや絵・作品等のコピー(写真)も添付するとよい。		
学校生活の状況 ・行動面，生活面での特徴 ・友達関係　等 ※ 気掛かりな点ばかりではなく，すばらしい点についても記入する。			
家庭や地域における生活の状況 保護者の願い ※ 協力が得られれば，生育歴も分かるとよい。			
その他の情報 ・医療機関等 ・相談機関等 ・その他			
校内委員会としての考え			